

北海道大学における奨学支援への取組

横山 伸一

(北海道大学学務部長)

一 はじめに

北海道大学は、学士号を授与する日本で最初の近代的高等教育機関である札幌農学校として、一八七六年（明治九年）に創設された。

初代教頭のW・S・クラーク博士が札幌を去る際に見送りの学生たちに残した言葉「Boys, be ambitious」は、全国的に知られている。

本学は、百三十余年の歴史の中で教育研究の理念として、「フロンティア精神」「国際性の涵養」「全人教育」「実学の重視」を掲げ、国際的な教育研究の拠点を目指して教職員・

学生が一丸となって努力しているところである。

平成一六年度からの国立大学法人化に伴い、本学の中期目標・中期計画では、「学生の修学意欲の向上やボランティアなどの社会活動を促進するため、顕彰制度の充実を図る。」を掲げ、総長室の下に設置された「教育改革室」（教育担当副学長を室長とし、事務局長・三名の役員補佐・教育研究組織から四名・学務部長の一〇名で構成）において鋭意検討された。

この結果、大学を巡る今後の競争的環境、大学全人時代の到来等を考慮し、学生の生活環境を改善するための取組の一環として、平成一七年度から学生の勉学や研究への

「やる気」を引き出すため、『北海道大学新渡戸奨学金』『北海道大学大塚奨励金』並びに私費外国人留学生に特化した『北海道大学総長奨励金』を創設した。

これらの制度の概要は、次のとおりである。

二 北海道大学新渡戸奨学金（後に「新渡戸賞」となる。）

① 学業成績が秀でており、かつ、人格に優れ、他の学生の模範になると認められる学部学生に対し、優秀学生育成のために奨学金を給付するものであり、平成一六年度入学者から実施する。

② 奨学生の対象は、学部一・二年学生で、学部ごとに定員三〇名に一名の割合とし、全学で八九名を予定

③ 判定基準は、一学年時に別に定める単位以上を修得した者のうち、成績上位の者（末尾に同点者がある場合はこれを含む。）に給付。その単位の計算方法は、GPAによる計算方式とする。

④ 奨学金の額及び給付の方法は一人二〇万円とし、六月一二月の二回に分けて各一〇万円支給

⑤ 奨学生は、学部長の推薦により、総長が決定する。

⑥ 事業総額 一七八〇万円

冠は、戦前の日本を代表する国際人・教育者であり、「旧五千円紙幣」の肖像として広く知られている新渡戸稲造博士に因んでいる。博士は、明治一四年に札幌農学校（北海道大学の前身）第二期生として卒業され、明治二四年から七年間母校の教授として教鞭をとられた。

名著「武士道」による日本の精神文化の紹介、国際連盟事務局次長としての平和文化活動は、博士の名声を国際的に高めることになった。また、「われ太平洋の橋とならん」という名言もよく知られるところであり、まさに本学の成績優秀者に与えられる賞に相応しい名称であるといえる。

三 北海道大学大塚奨励金（後に「大塚賞」となる。）

本制度は男女共同参画事業の一環として、研究者を目指す優秀な女子学生育成のための奨励金制度である。

① 対象は、大学院博士課程最終年次学生（留年者を除く。）で、当該年度内に修了する女子学生一〇名に給付する。

ただし、留年者であっても特別な事情があると総長が認めた場合は、対象者とする。

② 各研究科長（学院長）からの推薦により、教育改革室で審査を行い、総長が決定する。

③奨励金の額は、一人五〇万円とする。

④事業総額 五〇〇万円

この賞の選考基準は特に設けていないが、業績目録（博士学位論文名・競争的資金の獲得状況・留学先での学位論文・学会誌又は学術雑誌への論文掲載・学会賞又は学術賞等の受賞状況・修業年限の短縮・研究科等で認められた業績・その他の研究歴）にウエイトを置き選考に当たっている。

当初は、六・九・一二・三月の修了時に行っていたが一九九年度から年度末に選考することとなった。

また、この賞の趣旨に鑑み、一年後に現況報告やその研究成果報告を提出させることを義務づけた。

これまでの二〇名の受賞者は、現在、大学や理化学研究所、産業技術総合研究所、薬品会社研究部門等において研究者として活躍している。

冠は、本学の監事をされている名誉教授の大塚榮子先生に因んでいる。

先生は、本学医学部薬学科を卒業、同大学院薬学研究科博士課程を修了し、薬学博士の学位を授与され、その後米国ウィスコンシン大学等の勤務を経て、昭和五九年から本学教授として平成一年の退官まで勤務された。この間、「日本薬学会奨励賞」、「高松宮妃癌研究基金特別学術賞」、

「秋山記念生命科学振興財団賞」などを受賞するとともに、平成八年には「日本学士院賞」を受賞されている。

また、平成一七年には産業技術総合研究所から「名誉フェロー」の称号が授与されている。

女子の博士課程修了学生が少ない時代に、研究者として数多くの業績を上げられた大塚先生の名を冠としたこの賞は、研究者を目指す本学的女子学生の大きな励みとなる賞であるといえる。

四 北海道大学総長奨励金

この制度は、大学院に優秀な私費留学生を受け入れるため、学業が極めて優秀で、かつ、本学の教育研究等及び日本文化等に大きな関心を持つ外国人に対し、奨励金を給付することにより、留学生の質的向上及び受入れの拡充を図ることを目的としている。

①選考方法は、総長が予め指名した本学に在職の外国人教員五名が、それぞれ二名以内の候補者を総長に推薦し、国際交流室の下に選考会を設けて選考する。

その基準は、専攻分野及び研究計画の適格性、学業成績が極めて優秀であり、日本語能力が優れていることである。

②給付額は一人につき二〇〇万円（初年度）で、その期間は、修士課程二年以内、博士後期課程三年以内（医・歯・獣医は四年以内）、専門職学位課程二年以内（法律実務専攻は三年以内）で二五〇万円の給付としている。

これは、初年度において渡日・帰国旅費、検定料、入学料、授業料を、次年度以降は授業料をそれぞれ補填する分を含めている。

③事業総額 一〇〇〇万円

以上を基にして、平成一八年四月に中国から二人、韓国から一人、一九九四年四月も同様、二〇〇四年四月にあっては、中国から三人を候補者として決定しているところである。

五 おわりに

以上が全学的に取り組んでいるものであるが、医学部には音羽博次奨学金、農学部は私費外国人留学生奨学金、情報科学研究科の瓔珞奨学金、公共政策学教育部の成績優秀者への勉学奨励金など各部門においてもそれぞれの資金（基金）によって奨学支援を行っている。

国立大学法人となつたいま、大学運営の効率化が求められ、安定的な財政基盤の確立がきわめて重要な課題となつ

ている。本学においては、大学の自主性・自立性をこれまで以上に発揮するため、創基一三〇年目の挑戦として、独自の基金を設けることが不可欠であるとの認識に立ち、広く企業、個人、同窓生及び教職員から支援を頂く「北大フロンティア基金」を創設した。

この基金からの支援の一つとして、奨学金等制度の充実があげられている。金額・人数の問題もあろうと思われるが、到来する大学全入時代において、これまで以上に多様な学生が入学することが予測される中、いかに優秀な学生を確保していくのか、いかに付加価値をつけて社会に送りだしていくのか、この基金の使途・有効活用について大学全体の問題として捉え、大学の使命を再度確認し、学生の立場になって考えていかなければならないと思う。

本学にとって、これらの制度により、どのような成果が得られたのかを次期中期目標・中期計画策定までに検証していく必要がある。

また、教育費の負担軽減、教育の機会均等への寄与、次代の社会を担う人材育成の観点からも、学生に対する日本学支支援機構の奨学金事業の更なる充実・発展を期待したい。